新交響楽団



第89回演奏会

指揮 / 山岡重信（客演）

Ⅰ.ストラヴィンスキー	Igor Stravinsky
舞踊音楽「春の祭典」	"Le Sacre du Printemps"
第Ⅰ部　大地礼賛	Part Ⅰ L'adoration de la terre
1．序　奏	1 Introduction
2．春のきざし―乙女たちの踊り	2 Les augures printaniers-Danses des adolescentes
3．誘かい	3 Jeu de rapt
4．春の踊り	4 Rondes Printanières
5．敵の都の人々の戯れ	5 Jeux des cités rivales
6．賢人の行列	6 Cortège de sage
7．大地へのくちづけ	7 Adoration de la terre
8．大地の踊り	8 Dance de la terre
第Ⅱ部　いけにえ	Part Ⅱ Le sacrifice
1．序　奏	1 Introduction
2．乙女たちの神秘なつどい	2 Cercles mystérieux
3．いけにえの賛美	3 Glorification de l'élue
4．祖先の呼び出し	4 Évocation des ancêtres
5．祖先の儀式	5 Action rituelle des ancêtres
6．いけにえの踊り	6 Danse sacrale
J.ブラームス	Jahannes Brahms
交響曲第１番 ハ短調　作品68	Symphony No. 1 C-moll Op. 68
Ⅰ．ウン　ポコ　ソステヌート　アレグロ	Ⅰ Un poco sostenuto Allegro
Ⅱ．アンダンテ　ソステヌート	Ⅱ Andante sostenuto
Ⅲ．ウン　ポコ　アレグレット　エ　グラツィオーソ	Ⅲ Un poco Allegretto e grazioso
Ⅳ．アダージオーアレグロ　ノン　トロッポ　マ　コン　ブリオ	Ⅳ Adagio-Allegro non troppo, ma con brio

1980年９月６日(土)　７時

東京文化会館

指揮者紹介

山岡重信。　1931年　東京生まれ。
早稲田大学理工学部電気通信学科卒。

ヴィオラをW・カルボーニ、作曲を小船幸次郎，指揮を岩城宏之、斉藤秀雄の各氏に学ぶ。読売日響などでのヴィオラ奏者としての活躍を経て、1964年から藤原歌劇団副指揮者として、指揮活動を開始した。同年、民音指揮者コンクールに入賞、読売日響の指揮者に就任し、ベートーヴェンの第9交響曲で華々しくデビューを飾った。1972年より都響指揮者として活躍。1976年9月より一年間、文化庁派遣海外研修員として、ドイツ・オーストリアに遊学。

新響への登場は1975年にブルックナーの第4交響曲を振って以来二度目。再び新響を振っていただくことは長い間、団員の強い願いであった。5年ぶりに接したその指揮は以前にも増して重厚であり、音楽への情熱は熱い。共演を喜びたい。

新交響楽団

新交響楽団は1956年3月創立。主婦、学生及び様々な職業を持つ社会人から構成されている。創立以来、音楽監督芥川也寸志の献身的な指導のもとに、ソビエト演奏旅行の他、九州沖縄等の国内演奏旅行、ベートーベンチクルス、ストラビンスキー3部作一挙上演等を行った。

1976年には創立20周年記念として「日本の交響作品展」と名付けた2夜にわたる演奏会により、「芥川也寸志と新交響楽団」は第8回サントリー音楽章を受賞。

今、アマチュアオーケストラとしての社会的意義を問い直そうと長期計画を立案、実行中。その一端として一年を企画、基礎練磨、名曲、挑戦という4つのシリーズに分け、それぞれの演奏会に展望をもたせ地道にこなしていくことにより、よりよいオーケストラを目ざしている。今回は名曲シリーズに当たる。

楽曲解説

舞踊音楽「春の祭典」

長い冬の凍結のあとに、荒々しくロシアの大地を叩いて到来する春のリズム。このリズムを古代異教徒の祭典のなかに露わに再現しようとする発想は、〈火の鳥〉完成前後には、すでにストラヴィンスキーに抱かれていたし、ディアギレフを熱中させるものでもあった。予定外の〈ペトルーシュカ〉の出現によって〈祭典〉の実現はおくれてしまったが、それだけに準備も周到で、前二作の経験が十二分に活かされる結果を導びいたともいえるだろう。こうして、〈祭典〉は、彼のいわゆるロシア主義時代を代表する、もっとも綜合的で記念碑的な作品となったのである。とくにまとまった筋はなく、音楽は二部に分かれて展開されてゆく。

1913年にパリで行なわれた初演は、バレー芸術史上未曽有の大きな反応を惹き起こしたといわれる。当時としては漸新をきわめたストラヴィンスキーの音楽、とくに型破りのリズムの効果に大半の原因があったが、この音楽に応ずるニジンスキーの振付もまた、きわめて革新的なものであった。踊り手自身、この振付には容易についてゆけず、初演までに 120回に及ぶリハーサルを要したと伝えられている。

交響曲　第1番　ハ短調

この第1交響曲はブラームスの出発点として他の3交響曲のいずれにもましてベートーヴェンに近づいている。この曲が「運命」と同じハ短調であること、「運命」と同様に基本動機が全体に重要な役割を演ずること、内容がベートーヴェンと同様に精神的闘争と勝利を暗示すること、細部にベートーヴェンの交響曲の音形や和声に似たものがあること、などを通じても、ブラームスのベートーヴェンに対する深い崇敬の念をきくことができる。しかし管弦楽法において彼は交響曲にふさわしい自己独持のものを打出そうとした。楽器の編成そのものはむしろベートーヴェン時代を厳格に範としているが、音量や音色は古典的な構築性を出すというよりも、全体に独持な音色を基調として保ちつつその中で繊細な変化を得ようとしている。もちろん第3、第4交響曲におけるブラームスの独創的な渋みを帯びたひびきは、まだここでは充分出ていないにしても、個性的な色彩そのものは第1交響曲ではっきり打出されている。すでに曲頭における弦楽器の高い音域、管と弦との厚ぼったい和声の構成など、ブラームスがこの曲によって確信をもって自己のスタイルを出したことを物語る。自己批判に厳格だったブラームスがこの傑作を作り上げたときは43才にもなっていた。